

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*** Zeiss 製 Polarisations-Sonnen-Prisma nach Colzi の木箱**

アーカイブの仕事で収蔵した中に「Zeiss 製 Polarisations-Sonnen-Prisma nach Colzi」と書かれた器具について、アーカイブ新聞第 647 号、985 号に記事を書いた。しかし、この器具の詳細を知ろうと、コーヒータム仲間の国立天文台名誉教授木下氏の部屋に持ち込んで歓談のネタにしていた。木下さんは木工細工が趣味である。彼は天体力学が専門なので、この観測装置に知見があるとは思っていなかったが、木下部屋で話しているうちに、太陽観測の専門家の日江井先生に尋ねてみるとか、ドイツにいる小平さんに尋ねてみたらどうかという知恵を授かった。

木下さんは、別の目で興味をお持ちになったのである。「Polarisations-Sonnen-Prisma nach Colzi」の入っていた木箱（写真 1）の細工が気になったのである。この観測用器械はドイツから 20cm 屈折望遠鏡の付属品として輸入されたものであり、この木箱入りで日本に来たのでドイツ製である。箱を作るときの木組みが日本のものと違うというのである。確かによく見ると木組みが斜めになっている（写真 2）。



写真 1



写真 2 斜めの木組み

木箱を作る際、このような木組みが用いられることはよく知られている。しかし、日本では一般に写真 3、4 のように直角を使った木組みが一般的である。しかし、この木組みでは面方向に垂直方向の力に対して容易に外れると思われるが、ドイツからやってきた木箱の写真 2 のように斜めの木組みがなされていれば、箱の形状をしている限り面方向に垂直な力が働いても外れない工夫と思われる。

この場合の木組みは、木箱を作るための工夫であるが、日本だけではなかろうが、木造建築、時に神社、寺の建設には、もっともっと複雑な木組みが多用され、頑丈な建築物を建造している。



写真 3



写真 4

木下氏の気づいたもう 1 点は、箱の天井板が鉄のねじくぎで止められていることであった（写真 5）。これだけの工夫をした木組みの箱ならば、木釘を用いるべきであったと！



写真 5 鉄のねじくぎが用いられている

さらに調べてみると、この木箱には内箱上に内貼りが施されている（写真 6、7）。

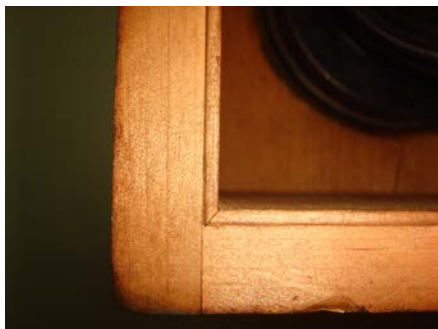


写真 6、7 箱の内張り状の内箱

そして箱中に入れられる器具を固定する細工も施されている（写真8）。



写真8 斜め、凹凸に切られた機械支えの支柱

写真8の器具固定の細工が、器具の形状がうまく収まるように斜め、凸凹が作ってある。器具の様子が写真9である。



写真9

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp